自然遊学館だより

2010 SPRING

No.55

■2010. 4.30 発行 貝塚市立自然遊学館

◆行事レポート
春の七草摘みハイキング
「蓍原ほの字の里」 ・・・・・・・・・・・・・・ 1
冬の二色の浜・打ち上げられた貝拾い ・・・ 2
千石荘＆近木川河口
バードウォッチング ・・・・・・・・・・・・ 4
自然を食すⅢ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
成果発表会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

◆生きものよみもの
ミゾゴイの羽 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
貝塚市のハムシ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
貝塚市の直翅類は何種？ ・・・・・・・・・・・・ 10

◆泉州生きもの歳時記
冬の海岸で見かけるヤドカリ ・・・・・・・・・ 12

◆館長コーナー
春 5. 生き物を切り絵に ・・・・・・・・・・・・・・ 14

◆展示紹介
カメの飼育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

◆投稿
与那国釣行 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
南部貝類採集記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
シラスウナギを採集 ・・・・・・・・・・・・・・・ 20

◆寄贈標本の紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
◆スタッフ日誌 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
◆お知らせ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

裏表紙： 津田川の歌（見学 稔氏）

表紙の写真：ムササビ。英語の flying squirrel は、「飛ぶリス」という意味。皮膜を広げて滑空する。

◆行事レポート

春の七草摘みハイキング
「蕎原　ほの字の里」

場所：蕎原ほの字の里周辺
日時：2010 年 1 月 6 日（水）10:00～12:30
　　参加者 46 人

数日前より寒波襲来、厳しい寒さの中、集合場所「ほの字の里」グランドで受付を始めました。スタッフも参加者もその場駆け足状態で、「昨日よりは少しましですね」と慰めあい、子どもたちにはグランドを駆け回って待ってもらうよう勧めました。

その日のスタッフ岩崎、白木、山田、湯浅を紹介した後、「農家の方が大切にしておられる田畑に入らないで採集してほしい」と、しつこくお願いしました。

蕎原では見つかりにくい植物として、植木鉢に仮植えしたハハコグサとナズナをじっくり見てもらい、次に名前も植物の見分け方もやっかいなホトケノザを紹介しました。現在ではシソ科にホトケノザという名の植物が存在しますが、七草に入っているホトケノザという植物はそれではなく、キク科のコオニタビラコをさし、蕎原では刈田の縁にたくさん生えています。セリ（セリ科）は、湿った場所を好み、蕎原では見つけ易いのですが、生えている場所も葉も似ている有毒のキツネノボタン（キンポウゲ科）と間違えると困ります。ハコベ（ナデシコ科）は街中でも多く、蕎原では場所を選びません。

恒例により湯浅班と白木班にわけ、湯浅班が先発しました。

セリ

集合場所に近いサツキの植え込み根元に、チチコグサモドキ（キク科）が花を咲かせていました。花の咲いている状態では、ハハコグサとの違いはよく分かりますが、芽生えのときは区別がつきにくいものです。少し離れた場所に近ごろ勢力を増しているウラジロチチコグサも生えていて、この仲間は他にチチコグサ、タチチチコグサ、セイタカハハコグサなどもあるのだと話し、みんなを混乱させてしまいました。

ハハコグサ

ほの字の里を出る坂道脇に、はやハコベが生えていました。よく見るとオニタビラ

コ（キク科）が長い花柄の先で花を咲かせています。オニタビラコは、全体的にコオニタビラコより大きく、毛が多く、都会の用水路の縁などにも生えています。店頭で売られている春の七草セットでは、コオニタビラコの代わりにオニタビラコを入れてあることもあります。

道路際の田んぼをのぞきこんで、コオニタビラコを採りました。花の咲いていない小さなロゼット状態では特徴が捉えにくいようで、葉をちぎって「これでいいのですか」と、みんな自信なさげです。

田んぼの脇で七草さがし

用水路に生えているセリ（セリ科）を見てもらった後、田んぼの畦道を歩いてセリを探しました。最初は、他の植物と混生している中からセリを抜き出すのは難しそうでしたが、何度も尋ね、何度も出会っているうちに、3 歳の「ともき君」も見分けられるようになりました。

毎年のことですが、フユイチゴ（バラ科）は子どもたちの間で大人気、最初は競争、後はよく熟れたイチゴを求めて走り回っていました。コオニタビラコを採集してから、ほの字の里近くまで戻り、許可をもらっていた田んぼの畦でハハコグサの観察をし、休耕田の中に入ってナズナ摘みをしました。七草のうちの野草 4 種を摘み終わり、摘めなかったハハコグサは、あらかじめ別の場所で採集してあるのでお渡しできること、またカブラ（すずな）、ダイコン（すずしろ）は川村館長の畑からいただいていることを告げ、寒さから逃れるようにほの字の里の食堂に向かいました。

ほの字の里でいただいた今年の七草がゆは、出汁がほどよく利き、お餅はほどほどにやわらかく、子どもたちもお代わりをよくして、お鍋は空っぽになりました。

（白木 江都子）

冬の二色の浜・打ち上げられた貝拾い

場所：二色の浜

日時：2010 年 2 月 13 日（土）13:00～15:30

参加者 46 人

この冬の近木川河口は右岸に堆積した砂が川へ向かって細長く伸び、河口を塞ぐような地形（砂嘴（さし））になっています。打ち上げ貝がたくさん拾える河口右岸へ行くのに、左岸側からもジャンプしても行けそうなほどです。しかし、観察会は安全第一、参加者の方々には例年通り右岸の護岸にハシゴをかけロープを伝（つた）って、河口右岸の浜辺にお集まり頂きました。

講師の児嶋格さんからどのような場所に貝殻が多く打ち上がるのか説明頂き、行事は始まりました。

右岸と左岸がくっつきそうな近木川河口

満潮線に沿って、木の枝や落葉、木の実などの茶色と貝殻の白色が交じり合い、帯状に散らばっています。参加者はこのラインをたどるようにして、しゃがんでは貝を拾っていきました。

帯状に打ちあがった漂着物を拾う

約 40 分間、自由に採集をしたのち、集合です。各自の採集物をバットに入れて一堂に集め、種類ごとに分けていきました。海産の貝はイナザワハベガイ、アラレガイなど 46 種類が確認されました。陸産の貝も川を通じて流れてきたのでしょう、アズキガイ、オオケマイマイなど 6 種類が打ち上がっていました。貝以外にはカニ、ヒトデ、ウニの仲間や、ゴカイの住んでいた棲管が見つかりました。

近木川河口右岸前浜に打ち上げられた生物

2010/2/13 自然遊学館観察会 参加者46人 講師:児嶋 格

グループ			和 名	2010/2/13 46名
軟体動物	多板綱	ケハダヒザラガイ科	ヒメケハダヒザラガイ	rr
	腹足綱	ヨメガカサガイ科	ヨメガカサ	rr
			マツバガイ	rr
		ニシキウズ科	コシダカガンガラ	c
			イシダタミ	r
			チグサガイ	rr
		サザエ科	サザエ	rr
		タマキビ科	タマキビ	r (L)
		ソデボラ科	シドロガイ	rr
		カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	c
		ムカデガイ科	オオヘビガイ	rr
		タマガイ科	ツメタガイ	c (L)
			アダムズタマガイ	r
			オオネズミガイ	rr
			ネコガイ	rr
		イトカケガイ科	イナザワハベガイ	rr
		アッキガイ科	レイシガイ	r
			イボニシ	c
			アカニシ	r (L)
		フトコロガイ科	ムギガイ	r
		ムシロガイ科	アラムシロ	r (L)
			アラレガイ	rr
		ブドウガイ科	ブドウガイ	rr
		カラマツガイ科	カラマツガイ	rr
	二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ	r
			サルボウガイ	c (L)
		イガイ科	ムラサキイガイ	r
			ミドリイガイ	rr
			ホトトギスガイ	c
		ハボウキガイ科	タイラギ	rr (L)
		イタヤガイ科	イタヤガイ	rr
		ナミマガシワ科	ナミマガシワ	c
		イタボガキ科	マガキ	cc
		ザルガイ科	トリガイ	rr
		バカガイ科	バカガイ	r (L)
		チドリマスオ科	クチバガイ	r (L)
		ニッコウガイ科	サクラガイ	r
			ヒメシラトリガイ	r (L)
			ゴイサギ	rr
		マテガイ科	マテガイ	rr
		イワホリガイ科	ウスカラシオツガイ	rr
		マルスダレガイ科	オニアサリ	r
			カガミガイ	c (L)
			アサリ	cc (L)
			ウチムラサキ	rr
		オオノガイ科	オオノガイ	rr
	淡水産	タニシ科	ヒメタニシ	rr
		リンゴガイ科	スクミリンゴガイ	r
		シジミ科	マシジミ	rr
	陸産	アズキガイ科	アズキガイ	rr
		キセルガイ科	ナミギセル	rr
			コンボウギセル	rr
		オナジマイマイ科	クチベニマイマイ	rr
			ウスカワマイマイ	rr
			オオケマイマイ	rr
	頭足綱	コウイカ科	コウイカ科の一種	rr
節足動物	甲殻類	ガザミ科	タイワンガザミ	r
		モクズガニ科	モクズガニ	r
			イソガニ	rr
			タカノケフサイソガニ	rr
棘皮動物	ヒトデ類	マヒトデ科	マヒトデ	rr
	ウニ類	サンショウウニ科	サンショウウニ	rr
環形動物	多毛類	ナナテイソメ科	スゴカイイソメの棲管	r
		カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ類の棲管	r
			計	64

凡例：数量 …… cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数　　生体確認 …… (L)

（山田 浩二）

千石荘＆近木川河口 バードウォッチング

場所：千石荘・近木川河口
日時：2010 年 2 月 21 日（日）10:00～15:00
参加者 26 人

冬鳥がよく見られる季節になりました。平原や池、海などにいってみると冬にしか来ない鳥などがいます。今回は朝から千石荘で、お昼からは近木川河口付近で、鳥の観察会を行いました。

講師には、大阪市立自然史博物館の和田岳先生に来てもらいました。朝からは、千石荘のバス停に集合して、そこからカンコ池に向かい歩きました。カンコ池に行く道の中でいろんな野鳥に出会うことが出来ました。特によく見られたのは、猛禽類のノスリとオオタカでした。原っぱ（千石荘病院の跡地）に行き、スコープや双眼鏡を使い多くの鳥と出会うことができました。カンコ池に行くと、カイツブリやダイサギ、ゴイサギ等の鳥と出会うことができました。帰り道にノスリとオオタカが何回も見ることができて、参加者の皆さんは喜んでいました。

行事の数日前に「ナベヅルを見に来て下さい」というお誘いを、清児の行道義さんから受けて、当日のルートを変更して向かいました。ナベヅルは水田に 3 羽いて、行さんから餌やりの話などを伺いました（このナベヅル 3 羽は結局、3 月 11 日に飛び立ったそうです）。

午後からは、自然遊学館に集合して、近木川河口付近の観察会を始めました。近木川河口付近では、カモ類を多く確認する事が出来ました。一番多かったカモはヒドリガモでした。少し川を上がっていくと、きれいな鳥が飛んでいったので、みんなが、双眼鏡やスコープで合わせてみると、カワセミが臨海線付近で見られました。カワセミは、いつもならすぐ逃げるのですが、今回は行事が終わるところまで、同じ場所でいました。行事の最後には、和田先生に、今回見られた鳥の名前、生態を説明していただきました。今回の観察で 42 種の野鳥が見られました。

【千石荘～カンコ池】
カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、トビ、オオタカ、ノスリ、バン、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ルリビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス

【清児】
カワウ、ノスリ、ナベヅル、ケリ、ヒバリ、タヒバリ、ツグミ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

【近木川河口付近】
カンムリカイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、トビ、ノスリ、シロチドリ、ハマシギ、イソシギ、キジバト、ドバト、カワセミ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、イソヒヨドリ、ツグミ、アオジ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

翌日、行事に参加されていた食野俊男さんが、去年までのデータと比較できるように、千石荘～ボタン池～鳶ガ崎池を回って鳥の観察記録をとってくれました。

【千石荘～ボタン池～鳶ガ崎池】(2／22)
カイツブリ、カワウ、アオサギ、コガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモ、オオタカ、ノスリ、オオバン、ケリ、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

（鈴子 勝也）

自然を食すⅢ

場所：自然遊学館多目的室
日時：2010 年 3 月 27 日（日）12:00～13:20
参加者 28 人

午後 12 時スタートしました。簡単な挨拶の後すぐ食事です。本日のメニューは主食「イカメシ」、汁物「アサツキ」、おかず「てんぷら」です。てんぷらは「野草を食べる」と言うことで、用意した材料はヨモギ、タラの芽、ツクシ、セリ、フキの葉、カラスノエンドウ、レンゲです。

早くから国家資格を持つ栗山昭先生がイカメシやアサツキ汁の準備をしてくれ、午前 11 時を回った頃からてんぷらを揚げ初めてくれました。いつもながら見事な手さばきです。まとまり性のない材料ばかりでしたが、材料を小麦粉にまぶし、手で調えながら熱された油に直接指をつけて揚げていかれる姿に感動しました。経験不足の私たちは決して真似てはいけないと思いますが、専門家の仕事とはこんなのだと驚きました。

本日の参加者は第 2 部の「成果発表会」とかねていましたので、すぐに申し込み枠一杯になりました。しかし、締め切った後から何人も問い合わせがあり、断るのに苦労しました。その参加者は小さな子どもたちから引率の保護者の方、祖父母の方など年齢に大きなばらつきがあり、このメニューが気に入ってもらえるかが不安でした。しかし、それはとりこし苦労となりました。みんなおいしそうに次から次へとお変わりです。その忙しさにまぎれて「おいしさアンケート」をとるのを忘れてしまいました。

食事の後、栗山先生から本日の料理の解説がありました。身の回りにあります「春の草など」を使ってててんぷらにするのは野趣があり、食についての認識が高まる中、とても推奨できることであると結ばれました。

次に、西小学校の栄養教諭の大蔵先生に

食材の栄養学観点から解説していただきました。ご用意されたコンピューターのパワーポイントが開かず、とうとう言葉だけで解説されました。そのことは逆によくわかり、楽しかったのですが、途中でコンピューターの機嫌が直り、面白くて、理解しやすい話を聞くことが出来ました。薬膳と言う言葉がありますが、野草を食すことで健康な体づくりをすることにつながると結ばれました。

当館の湯浅さんからは食材に使った野草の植物の話をしていただいて第 1 部終了となりました。

（川村 甚吉）

成果発表会

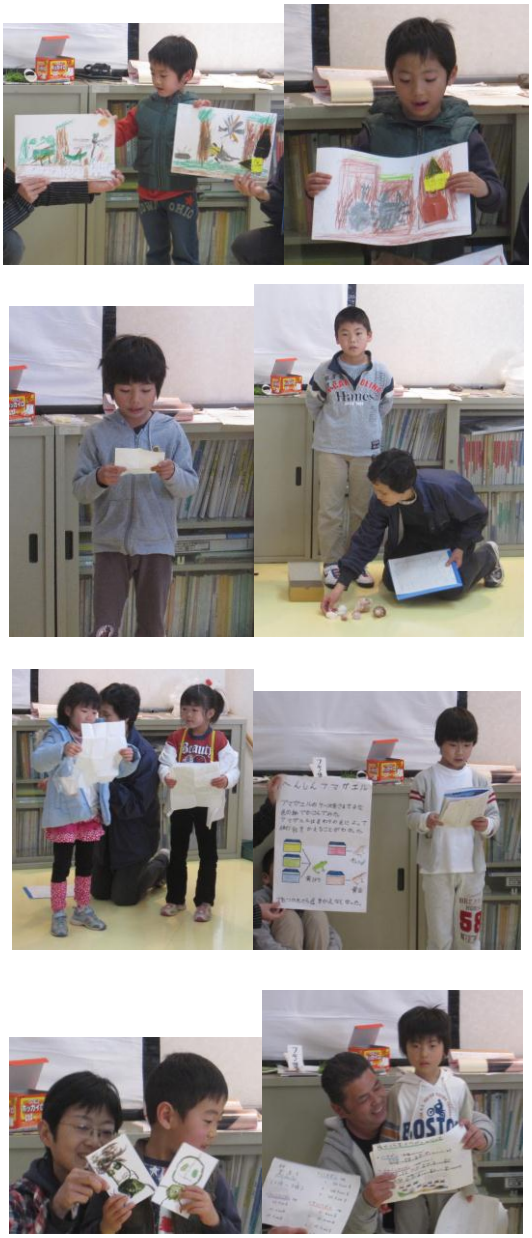
場所：自然遊学館多目的室
日時：2010 年 3 月 27 日（日）13:30～15:00
参加者 24 人

「自然を食すⅢ」のあとに続いて、「自然遊学館すごろく」と「成果発表会」を行いました。

すごろくの中に自然遊学館に関する質問が用意してあり、事前に親子で質問の答えを館内を探してチェックしておく、というすごろくです。うまく答えると早くゴールできます。

「自然を食す」の片付けや配置換えの間、質問の答えを見つけるために、館内は展示を見ながらメモをとったり、どこかな？と親子でさがしてガヤガヤ。

すごろくで盛り上がったあとは、発表です。21 年度館の行事で興味をもった事、楽しかった事などの発表です。年齢は 5 歳から 11 歳ですが、みんなとてもうまく、堂々と発表できました。



子供達の発表の様子

＜発表内容＞発表順は申込順です

尾野たいせいさん：去年採集した虫の絵と、今年採集したい虫の絵、折り紙

尾野こうせいさん：去年採集した虫の絵と、今年採集したい虫の絵、折り紙

石井ときあさん：バッタのオリンピックで一等賞をとった事

江本だいちさん：和歌山県南部で採集した貝やタカラガイの事

奥田みのりさん：（急用のため欠席、代わりに、保護者の方が読んでくれました）遊学館の行事参加についての感想、稚魚放流･地引網･カニつり･ツバメのねぐら観察･化石も参加したい、など

木嶋まきさん：化石の行事で、マキガイの化石を見つけた

木嶋りえさん：化石の行事で、ノジュールの化石などを見つけた

千地よしきさん：アマガエルを飼って、周囲の色でカエルの色もどう変化するか？を発表。海の行事で、ミズタマウミウシを見つけた事

品田こうきさん：遊学館行事で海藻おしばをつくったこと。おじいさんの畑でみつけた草花をノートに押し花。

吉川ゆうき：カニつりで、一番大きいハマガニを捕まえた。それで、カニの事を色々調べて発表

（湯浅 幸子）

◆生きものよみもの

ミゾゴイの羽

昨年の夏、自然遊学館職員の岩崎さんが和泉葛城山の登山道で拾った１枚の羽。「どんな鳥？」と聞かれたまま、預かりっぱなしになっていました。ようやく名前を調べようと、図鑑を引出してきました。『羽・原寸大写真図鑑』（文一総合出版、高田勝/叶内拓哉著）は、実物大の写真で紹介されている便利な本です。まずは羽のサイズから、鳥の大きさを想像します。最大の長さは92mm、幅は22mm。けっこう大きそうです。形は少し丸味があって、カモの羽のような雰囲気です。鳥の翼はいろいろな形の羽が重なり合って出来ているので、どの部分から抜けた羽か考えました。先の丸い雨覆あたりかな？

そして次に色。先と付け根は白く、真ん中が濃い茶と赤みがかった薄茶のまだらです。こんな雨覆いを持っていそうなカモ？大阪で確認されているカモを図鑑で捜しても、そんな模様のカモは見あたりません。私の羽探索はすぐにいきづまってしまいました。

図１．ミゾゴイの小翼羽（20090829 和泉葛城山登山道Ｂコース、岩崎拓採集）。

困ったときには鳥をたくさん見ている専門家に相談するのが一番です。いつもバードウォッチングの行事でお世話になっている大阪市立自然史博物館の和田岳学芸員にこの羽を見せました。和田さんも同じ図鑑を引っぱり出してきて、「えー？」と悩んでいます。しばらくたってからその理由が分かりました。

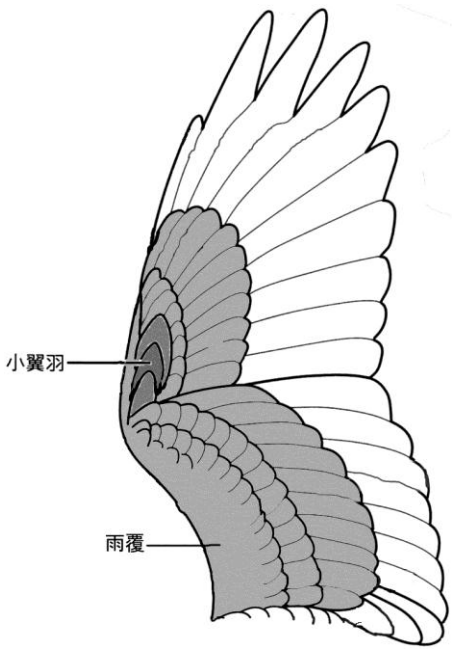


図 1. 鳥の翼。さまざまな形の羽が重なり合って出来ている。

この羽はミゾゴイの小翼羽（図 2）でした。「山で拾った」というキーワードと羽の模様でピンと来たようです。ミゾゴイは森林内にある川沿いの樹上に巣を作るサギの仲間で、夏になるとやってくる渡り鳥です。観察できることは稀で、大阪府では準絶滅危惧種に指定されている鳥だそうです。自然遊学館にもいままでミゾゴイの記録はありませんでした。1 枚の羽を拾ったことで、貝塚で確認された鳥が 1 種類増えることになったのです。この羽はさきほどの図鑑に載っています。羽と図鑑を見くらべてみたい方は、自然遊学館にお越し下さい。

（西澤 真樹子）

貝塚市のハムシ

ハムシとは、成虫幼虫共に植物の葉を餌とする甲虫（カブトムシの仲間）です。大きさは数 mm 程度のものが多く、種類ごとに様々な色や模様が見られます。日本では約 780 種のハムシが確認されており、うち貝塚市には 70 種が確認されています。千石荘や馬場、和泉葛城山で多くの種類が観察されていますが、イモサルハムシやヨモギハムシといった身近な種は道端の草むらでも見ることができます。注意深く葉の上を探すと見つけることができるでしょう。

ハマヒルガオの葉を摂食するイモサルハムシ
（二色市民の森 2009 年 5 月 9 日）

数年前、貝塚市千石荘で、道路の整備が行われました。しばらくすると道路脇に今までに見られなかった植物が見られるようになりました。オオブタクサという北米原産の植物です。オオブタクサはみるみる繁殖し、道路脇一帯に大量に繁茂してしまいました。おそらく仮舗装に使われた砂利に種子が紛れていたのでしょう。それからしばらく経った 2005 年 7 月 7 日、千石荘で二個体のハムシが確認されました。ブタクサハムシです。ブタクサハムシは増えに増えたオオブタクサを餌としていました。ブタクサハムシも北米原産の外来種です。もちろん自力で海を越えてきたのではなく、人間の生活に紛れて日本にやってきました。物も人間も世界中を飛び回る現在では、たくさんの動植物が人間と一緒に新天地へと分布を広げてしまいます。「生き物の分布を広げない。」大変難しいことでしょうが、生態系を守る上でとても大事なことです。むやみに分布を広げない工夫が必要ではないでしょうか。

ブタクサハムシ
（名越千石荘 2006 年 6 月 24 日）

ハムシ科の昆虫は、主に植物の葉を食べて育つので、種類によっては害虫として扱われるものもあります。しかし、種類ごとに実に様々な模様が見られ、楽しい昆虫です。中には光沢を放つような美しいハムシもおり、見ていて飽きることがありません。これから野山に出かける機会があれば、是非とも葉っぱの上を探してみてください。

シデ類の葉を摂食するズグロキハムシの幼虫
（和泉葛城山 2009 年 5 月 19 日）

貝塚市のハムシ科リスト
（自然遊学館確認分　2010年3月現在）

クビボソハムシ亜科
- アカクビナガハムシ
- キイロクビナガハムシ
- アカクビボソハムシ
- トホシクビボソハムシ

ナガツツハムシ亜科
- ヨツボシナガツツハムシ
- キイロナガツツハムシ
- キボシルリハムシ

ツツハムシ亜科
- タマツツハムシ
- ムナキルリハムシ
- バラルリツツハムシ
- クロボシツツハムシ

コブハムシ亜科
- ムシクソハムシ

ツヤハムシ亜科
- ドウガネツヤハムシ

サルハムシ亜科
- アオガネヒメサルハムシ
- ウスイロサルハムシ
- アオバネサルハムシ
- イモサルハムシ
- ウスイロサルハムシ
- ムナゲクロサルハムシ

サルハムシ亜科（つづき）
　クロオビカサハラハムシ
　マダラアラゲサルハムシ
　アカガネサルハムシ
　カサハラハムシ
　チビカサハラハムシ
　リンゴコフキハムシ
ハムシ亜科
　コガタルリハムシ
　ヨモギハムシ
　ドロノキハムシ
　ルリハムシ
　ズグロキハムシ
　フジハムシ
ヒゲナガハムシ亜科
　イチゴハムシ
　ジュンサイハムシ
　アカタデハムシ
　エグリバケブカハムシ
　ブチヒゲケブカハムシ
　ニレハムシ
　アトボシハムシ
　ウリハムシ
　クロウリハムシ
　ヨツボシハムシ
　ヒゲナガウスバハムシ
　オオルリヒメハムシ
　キバラヒメハムシ
　ウリハムシモドキ
　ムナグロツヤハムシ
　キクビアオハムシ
　イタドリハムシ
ノミハムシ亜科
　カミナリハムシ
　カミナリハムシ属の一種
　ホソルリトビハムシ
　アラハダトビハムシ
　ガマズミトビハムシ
　フタイロセマルトビハムシ
　サメハダツブノミハムシ
　ツブノミハムシ
　ヒゲナガルリマルノミハムシ
　マルノミハムシ属の一種
　アカイロマルノミハムシ
　キイロタマノミハムシ
　ムネアカタマノミハムシ
　ナガスネトビハムシ属の一種
　ヒサゴトビハムシ
　ルリマルノミハムシ
カメノコハムシ亜科
　カメノコハムシ
　ヒメカメノコハムシ
　イカリヒメジンガサハムシ
　イチモンジカメノコハムシ
　コガタカメノコハムシ
ヒゲナガハムシ亜科
　ブタクサハムシ

（岡田 恵太郎）

貝塚市の直翅類は何種？

直翅類はバッタ目に近縁なグループを含み、翅の脈が直線状であるという共通の特徴を持ちます。コオロギのオスの翅脈は進化の過程で鳴くために複雑な形になりましたが、メスは鳴かず翅脈は古い形質を留めて直線状です（図 1）。

♂（オス）

♀（メス）

図 1. エンマコオロギの前翅

どういうグループを含むかというと、カワゲラ目、バッタ目、ナナフシ目、ハサミムシ目、カマキリ目、ゴキブリ目、シロアリ目、シロアリモドキ目、ガロアムシ目です。幼虫が水生のカワゲラ目、貝塚市で見つかっていないシロアリモドキ目とガロアムシ目は省いて、本稿では貝塚市にいる残りのグループについて簡単に紹介したいと思います。

バッタ目に関しては、本誌 47 号で貝塚産が 95 種と発表しました。それ以降に増えた種は以下の 3 種で、現在は 98 種になっています。

ヒメキマダラウマ
　和泉葛城山　2007 年 6 月 3-25 日
　採集：松下宏幸 [1)]
ヒメクサキリ　1♂
　和泉葛城山　2008 年 9 月 10 日
　採集：岩崎拓
タイワンエンマコオロギ　1♂
　二色　2008 年 9 月 13 日
　採集：前田一郎（本誌 49 号）

100 種が目前に迫ってきました。ただ、きしわだ自然資料館の平田慎一郎さんと作成した岸和田市と貝塚市の合同リストでは既に 102 種になっています[2)]。岸和田市で確認されていて貝塚市で見つかっていない種は、フタツトゲササキリ、クツワムシ、タイワンクツワムシ、ヒメスズの 4 種です。

バッタ目は種数が多いので、ここでは全リストを紹介できませんが、以下にそれ以外のグループのリストを示しました。2003 年に発行した「貝塚市の動植物リスト」[3)]から種数が増えていないのは、ナナフシ目（4 種）、ゴキブリ目（6 種）、シロアリ目（1 種）です。カマキリ目は、本誌 39 号で紹介したように、サツマヒメカマキリが増えて 7 種になりました。

貝塚市の直翅類リスト
（バッタ目以外、2010年3月まで）

ナナフシ目
　ナナフシ科
　　トゲナナフシ
　　ニホントビナナフシ
　　エダナナフシ
　　ナナフシモドキ

ハサミムシ目
　ハサミムシ科
　　ヒゲジロハサミムシ
　　ハマベハサミムシ
　　イソハサミムシ
　　キアシハサミムシ
　オオハサミムシ科
　　オオハサミムシ
　クロハサミムシ科
　　ミジンハサミムシ
　クギヌキハサミムシ科
　　エゾハサミムシ
　　コブハサミムシ

カマキリ目
　カマキリ科
　　オオカマキリ
　　チョウセンカマキリ
　　ハラビロカマキリ
　　コカマキリ
　　ヒナカマキリ
　ヒメカマキリ科
　　ヒメカマキリ
　　サツマヒメカマキリ

ゴキブリ目
　オオゴキブリ科
　　オオゴキブリ
　ゴキブリ科
　　クロゴキブリ
　チャバネゴキブリ科
　　ヒメクロゴキブリ
　　チャバネゴキブリ
　　モリチャバネゴキブリ
　　キスジゴキブリ

シロアリ目
　ミゾガシラシロアリ科
　　ヤマトシロアリ

最後に、ハサミムシ目は 5 種から 8 種に増えました。イソハサミムシ *Anisolabis seirokui* は、2008 年に西川勝氏が、これ

までハマベハサミムシの長鋏型として扱われていたものを新種記載したものです[4]（図 2）。

図 2. ハマベハサミムシ（左）とイソハサミムシ（いずれもメス成虫）

自然遊学館の標本にはそれが含まれていて[5]、先の「貝塚市の動植物リスト」ではハマベハサミムシとして報告しました。文献 5）で発表後に、新たに標本室から 1♀の標本が見つかりました。

イソハサミムシ　1♀
　二色　2002 年 6 月 17 日
　採集：祐成恵子

キアシハサミムシは灯台下暗しで、自然遊学館の周辺にたくさんいることが分かり、館内でも生体展示しています。餌やり（リンゴと金魚の餌）の途中で誤って卵をばらけてしまうと、母親がせっせと卵を集め直すというほのぼのとした習性を見せてくれます。ミジンハサミムシは体長 5mm の小型種で、2009 年 6 月 27 日の馬場での灯火採集で得られました。

なかなか直翅類に対象を絞った調査ができなくて、寄贈も含めて「偶然」に頼っている状態でありながらも、徐々にですが種数が増えてきたグループもあります。

引用文献

1）松下宏幸（2009）貝塚の自然第 11 号：109-113.

2）平田慎一郎・岩崎拓（2008）メランジェ 7（4）：3-6.

3）「貝塚の自然-創館 10 周年記念号」

4）Nishikawa, M.（2008）*Insecta Matsumurana*（New Series）64:35-51.

5）岩崎拓（2008）ばったりぎす 143：9.

本文中、本誌何号と記したものは、自然遊学館ホームページの「遊学館だより」のページでご覧いただけます。

（岩崎 拓）

◆ 泉州生きもの歳時記

冬の海岸で見かけるヤドカリ

寒い冬の季節は、海辺に出かける人たちも少なく、当館に持ち込まれる海で採集した生きものも、ぐっと少なくなります。寒さそのものが、多くの人にとって海辺に近づかない大きな理由だと思いますが、仮にマフラーに首を縮めて海辺に行ったとしても、春に潮干狩りをした時のような、潮のよくひいた光景とは大きく異なっています。大潮の干潮時だというのに、潮はあまりひいておらず、強い風に海面があおられ、しぶきが足元にかかる始末です。この時期は、1 日に 2 回ある干潮のうち、昼間はあまりひかず、夜間によくひくという季節的な

潮汐(ちょうせき)の特徴があるのです。

このように冬場では、昼間に海辺の生物を観察しづらいのですが、生きものたちはどのように生活しているのでしょうか？ 1年中同じように活動している？ 季節によって生息場所を変えている？ 冬眠・夏眠している？ など、生物の種類によって様々な暮らし方が考えられます。

一昨年の冬、二色浜の突堤づたいに海中をのぞいてみました。すると波打ち際近くの護岸についていた貝がいっせいに剥がれ落ちて沈んでいきます。あれっ？と思い、沈んでいく前に素早く捕まえて見てみると、貝殻を背負ったヤドカリで、そのほとんどがヨモギホンヤドカリという種でした。人の気配を感じて、逃避行動をとっていたのです。

二色浜突堤（2010年2月19日）

本種は以前にも自然遊学館だより 44 号で二色の浜での出現記録として紹介致しましたが、初夏、潮間帯上部に移動して転石下に集合した後、秋季まで活動性が低下することが知られています(Mishima&Henmi, 2008)。二色浜突堤の護岸でも、2007 年 9 月にランダムに 44 個体の活動しているヤドカリを採集したところ、ヨモギホンヤドカリは 3 個体のみで、ホンヤドカリ、ケアシホンヤドカリに続いて最も採集個体数が少ない結果（久保田ほか, 2007）となっています。一方、今年の 2 月に、同じ場所でランダムに 65 個体の活動しているヤドカリを採集したところ、ヨモギホンヤドカリ 64 個体、ホンヤドカリ 1 個体という結果になり、護岸の浅場で活動しているヤドカリたちは季節によって異なっているようでした。また、近木川の河口で、春から秋にかけての観察会シーズンに多く見かけるユビナガホンヤドカリも、10～3 月には潮下帯（潮のひかない深い場所）へ移動しているようです（Kikuchi, 1962)。

冬場、他にも貝塚市内の二色浜公園海浜緑地の石積み護岸や二色ヨットハーバーで見かけるヤドカリはその大半がヨモギホンヤドカリです。新種として 1996 年に記載されてから比較的日の浅い、本種の大阪湾全体での分布はどうなっているのでしょうか？このことの一端を調べるため、今年の 2 月から 3 月にかけて、北は尼崎市の甲子園浜から南は和歌山市の布引海岸までの大阪湾東部周辺の海岸、計 12 地点でヤドカリの採集を行いました。

詳しい結果はまた稿を改めて報告したいと思いますが、確認されたヤドカリは 6 種類で、ヨモギホンヤドカリは 12 地点のうち、最多の 9 地点で見つかり、採集した個体数も最も多いものでした。これらのことから、本種は大阪湾一帯に広く分布し、冬場の海岸で最もポピュラーに見られる種であることが考えられます。

ただ、本種の生息環境は多少とも内湾的

な海岸で、転石や護岸があり、河川水（淡水）の影響をあまり受けない場所にある程度限られるようです。例えば、片男波海岸と布引海岸の 2 つの採集地点は和歌川河口をはさんで接近していましたが、片男波は老朽化した岩の護岸で採集したところ、ヨモギホンヤドカリ、ユビナガホンヤドカリ、ホンヤドカリの 3 種が確認されたのに対し、布引海岸は砂地で、ユビナガホンヤドカリとテナガツノヤドカリのみしか確認できませんでした。

また、南の湾口部に位置し、外海の影響が強い和歌山市の田倉崎の磯では、確認できなかったものの、湾口に近い岬町の長崎海岸の磯ではホンヤドカリよりも多く採集され、自然の磯場においても生息していることがわかりました。

ヨモギホンヤドカリ（甲子園浜での採集）

引用文献

Mishima,S. and Y.Henmi (2008) *Crustacean Research*,37:26-34.

久保田梨裕ほか(2007) 自然遊学館だより,45:16.

Kikuchi,T.(1962) *Records of Oceanographic Works in Japan (Special Number6)* :135-146.

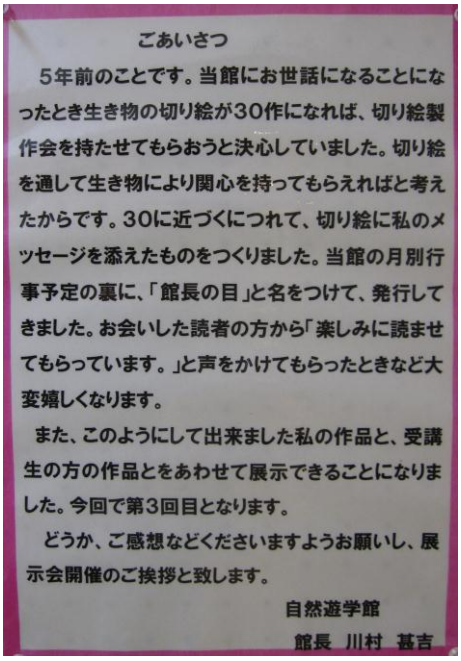
（山田 浩二）

◆館長コーナー

春５．生き物を切り絵に

当館にお世話になって 6 度目の春を迎えました。この間、切り絵製作会を 8 回開催させていただきました。また、私と受講生の作品を 3 回展示いたしました。

切り絵というひとつの手法を通して生き物の観察や実態に迫ることが出来ればと考えたからです。



ごあいさつ

5年前のことです。当館にお世話になることになったとき生き物の切り絵が30作になれば、切り絵製作会を持たせてもらおうと決心していました。切り絵を通して生き物により関心を持ってもらえればと考えたからです。30に近づくにつれて、切り絵に私のメッセージを添えたものをつくりました。当館の月別行事予定の裏に、「館長の目」と名をつけて、発行してきました。お会いした読者の方から「楽しみに読ませてもらっています。」と声をかけてもらったときなど大変嬉しくなります。

また、このようにして出来ました私の作品と、受講生の方の作品とをあわせて展示できることになりました。今回で第3回目となります。

どうか、ご感想などくださいますようお願いし、展示会開催のご挨拶と致します。

自然遊学館

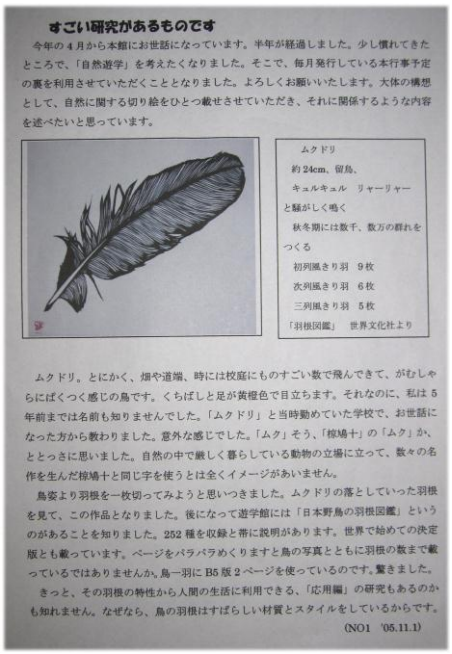
館長 川村 甚吉

生きもの切り絵展の会場

切り絵の基本は白黒の 2 色の表現です。表したい材料を白と黒だけで表現するのは極めて難しいことです。白黒写真はグレーが大幅に表現力となっています。切り絵の白黒世界とは大きく異なります。確かにカラーを使った切り絵もたくさんあります。私はカラーの作品を作るのは、作品をいくつか並べたとき何かしら物足りなさを感じるからです。白黒の明確な作品を見た後、カラーの触れると柔らかな優しさを感じます。そうした理由で私はカラー作品も同等数製作しています。

自分の表現したいものが白黒にするのか、カラーにするのかを考えて下絵を描きます。下絵が出来ると早速切っていくことになります。下絵を実際に切っていきますと、大抵は思っていないわかりにくいものになります。それを下敷きにして数回やり直し、やっと作品になるわけです。

その作品を使って、現在私は 2 つのことに利用させてもらっています。ひとつは当館の月中行事予定の裏を利用したコラムです。「館長の目」と題し、生き物の切り絵とその生き物に対する私の思いを載せたものです。この原稿を書いています。4 月上旬では 43 号になっていました。出来上がる前までは「今月はこれで行こう」とか「いいや、この方がいい」とか迷いますが、いったんコンピューターの前へ座りますと一気に出来上がります。生み出すまでの悩みが一気に解消されていきます。



すごい研究があるものです

今年の 4 月から本館にお世話になっています。半年が経過しました。少し慣れてきたところで、「自然遊学」を考えたくなりました。そこで、毎月発行している本行事予定の裏を利用させていただくこととなりました。よろしくお願いいたします。大体の構想として、自然に関する切り絵をひとつ載せさせていただき、それに関係するような内容を述べたいと思っています。

ムクドリ
約 24cm、留鳥、
キュルキュル　リャーリャー
と騒がしく鳴く
秋冬期には数千、数万の群れをつくる
初列風きり羽　9枚
次列風きり羽　6枚
三列風きり羽　5枚
「羽根図鑑」　世界文化社より

ムクドリ。とにかく、畑や道端、時には校庭にものすごい数で飛んできて、がむしゃらにぱくつく感じの鳥です。くちばしと足が黄橙色で目立ちます。それなのに、私は 5 年前までは名前も知りませんでした。「ムクドリ」と当時勤めていた学校で、お世話になった方から教わりました。意外な感じでした。「ムク」そう、「椋鳥十」の「ムク」か、ととっさに思いました。自然の中で厳しく暮らしている動物の立場に立って、数々の名作を生んだ椋鳥十と同じ字を使うとは全くイメージがありません。

鳥姿より羽根を一枚切ってみようと思いつきました。ムクドリの落としていった羽根を見て、この作品となりました。後になって遊学館には「日本野鳥の羽根図鑑」というのがあることを知りました。252 種を収録と帯に説明があります。世界で始めての決定版とも載っています。ページをパラパラめくりますと鳥の写真とともに羽根の数まで載っているではありませんか。鳥一羽に B5 版 2 ページを使っているのです。驚きました。

きっと、その羽根の特性から人間の生活に利用できる、「応用編」の研究もあるのかも知れません。なぜなら、鳥の羽根はすばらしい材質とスタイルをしているからです。

(NO1　'05.11.1)

人間五十年、化天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり。

標題は「人間５０年の人生など、化楽天（８０００歳の長寿を保つという楽土）の世界に比べると夢幻のように無常である」というほどの意味でしょう。本能寺の変で非業の最期を遂げた織田信長が愛誦したといわれます詞章です。

今回探りあげますのは「アンモナイト」であります。当館に団体で見学にくる小学生を含め、おそらくは 7 割以上の方はアンモナイトという名詞を知っているでしょう。それほどよく知られているアンモナイトですが、実際どの程度理解されているのでしょうか。私などは、カタツムリの大型くらいの化石、という認識です。皆様は私ほどでないにしても、知名度ほどには実態把握がなされていないように思うのです。しかも、アンモナイト研究は２００年以上の歴史があるようでありますから、知れば知るほど深みのある研究でもあるようです。研究とは別にその本物が貴線の薗原で採集され、この自然遊学館に寄贈されています。しかも、本館の形状がこのアンモナイトを模してつくられたといえばなお、興味が深まります。本館の前の歩道を二色大橋に向かって３０ｍほど歩きますと、全体像が見えてきます。本当にユニークな建物です。平成５年に開館した折などは、建物自体の見学もあったそうであります。

アンモナイト
・中生代（２５０００万年～６５００万年前）の化石
・平面螺旋上に巻くのと巻きが解けたり、伸びたりするものあり
・化石の直径１～１７００mm、白亜紀層からは約数ｃｍ～３０ｃｍ
・オウムガイに似るがイカやタコを含む鞘形類に近縁
・北海道の蝦夷層群から多く分布する
「アンモナイト学」東大出版会より

本館蔵のアンモナイトは Field Selection 20「化石」に掲載されています。そこには「ゴードリセラス・イズミニンセ」と表示され、「この標本は保存状態のよいもので、普通は地層の圧力を受けて変形した状態で見つかる」と絶賛されています。

採集地の薗原であります和泉層群が堆積したのは含まれる化石などから白亜紀後期とわかっているそうです。そうだとすると、実に6500万年もこの化石は化石として沈黙を保ちながら、成長してきたのです。

織田信長の時代から現在まで人間の寿命が数10年延びたくらいではお話になりません。アンモナイトと人間の一生を比べるとしたら比べることが論外であります。だから、こんなことを書いているようではアンモナイト化石さんに、「何を夢幻のごとくなり、とほざいているんだ」とお叱りを受けそうです。

（'06.8.1　NO10）

コラム「館長の目」

もうひとつは今年から始まりました「広報かいづか」の最終ページ「わがまち・かいづか」に連載していただいています「生きものだいすき」コーナーです。これは今までの「館長の目」字数がかなり違います

ので、一気には出来上がりません。2、3回やり直すこともありますが、切り絵は季節を先取りすることになりますので、楽しい作業となっています。現在までに4号が発行されましたが、私にとりましてはかなり満足のいくものであります。

さて、「生きものきり絵製作会」ですが、鋭いカッターナイフを使用しますので、小学校5年生以上10人までと限定させていただいています。そんなこともあってリピーターが多く新しい受講生が少ないのが悩みの種であります。本稿をお読みの方で興味がありましたら、是非ご参加くださいますよう呼びかけをさせていただいて、稿を閉じます。

（川村 甚吉）

◆展示紹介

カメの飼育

自然遊学館にはクサガメとミシシッピーアカミミガメ（通称ミドリガメ）の二匹のカメがいます。二匹とも一緒に飼育しています。二匹ともとても元気なカメで、餌をよく食べ、すぐに水を汚してしまいます。なので週に一度必ず水換えをしないといけません。水換えのときはカメ達をバケツに引っ越しさせ、大量の水で砂利を洗います。もちろんろ過器や石もしっかり洗います。

ある日の水換え中、カメの異変に気付きました。カメ達をバケツに避難させた際、ミシシッピーアカミミガメの甲羅が欠けていることに気付いたのです。たまたまどこかにぶつけてしまったのかもしれません。しかし、週を重ねるごとにどんどん甲羅がかけていくのです。クサガメがかじっているのだろうか？すぐにクサガメに疑いがかかりました。しかし二匹を見ている分には、とてもそのような素振りは見せません。いつも通り仲良く甲羅干しをしているのでした。

困りました。このままでは確実に証拠不十分です。かといってそのままにもしておけませんし、もちろん二匹は何も喋りません。なのである日の閉館間際にこっそりカメ水槽を覗いてみました。すると、クサガメがミシシッピーアカミミガメを執拗に追いかけ、甲羅に噛みついているのでした。このままではいけないので、すぐに水槽に仕切りをつくり、二匹を分けて飼育することにしました。少々狭くてかわいそうな気もしますが、仕方ありません。何はともあれ、早くミシシッピーアカミミガメの甲羅が再生してほしいものです。

仕切りをしたカメ水槽

（岡田 恵太郎）

◆投稿

与那国釣行

今年（2010 年）の春、大学の釣りサークルの友 2 人とともに日本最西端の島、与那国島に行ってきた。与那国島には週 2 便のフェリーと 1 日 2 便の飛行機でアクセスができる。しかし、与那国の海域は荒れやすく、空港付近の風も強いことが多く、上陸することが難しいことで渡難といわれる。

3 月 10 日、この日は石垣でも風が強く、石垣港からフェリーにて与那国へ行く予定だったが、もちろん欠航。仕方なく飛行機にて向かうことに。飛行機も着陸できないかもしれないという条件付の飛行だったが、そこらへんのジェットコースターよりもスリリングな着陸でなんとか上陸できた。今回、与那国島に来た理由は 1 つで黒潮に直面する海域でカジキを釣ることだった。

3 月 13 日、普段は漁師をしている船長の船に 3 人で乗せてもらい、日の昇る前に沖へと向かう。空には分厚い雲が覆い、風速は 10 メートル以上、海はうねりが入っている。30 分ほど沖へ走り、島が小さく見えるころ餌のカツオを釣る仕掛けを投入する。すぐに 50 センチ弱のキハダマグロが 3 匹ほど釣れ、1 匹をハンガーフックほどもある釣り針に付けて海に放り込む。

2 時間ほどたったころだろうか、釣り糸をとめていたゴムがはじけ飛ぶ。船のエンジンを全開にして針掛かりを試みる。しかし、糸はたるみ餌のマグロはぼろぼろになっていた。本当にカジキはいるのだという興奮が逃げられた悔しさを忘れさせた。しかし、いよいよ波が強くなり、さらに荒れてくる様子なので港に帰る。

それから数日間は海が荒れ海に出れず、焦燥感だけが募っていった。

釣りあげたバショウカジキ（32kg）

3 月 17 日、天気は一転。雲はあるものの陽は照り、風もなく海も穏やか。また前回と同じくらいの沖でマグロを餌に流し始めてから 2 時間弱、バチンと糸がはじける。ついに友達にあたりが来た。糸を出しえさを食わせエンジン全開。竿に魚の重みが伝わる。20 分後カジキが船の近くに寄ってきて銛（もり）をうち無事初カジキを釣り上げる。54 キロのクロカジキ。

その後、夕方は陸のすぐ 200mほど沖でルアー釣りをしていると、友達に大きなあたりが。魚が跳ねる。カジキだ！船長と僕は同時に叫んだ。まさかこんなところでカジキがかかるとは思いもしなかった。25 分後無事釣り上げる。32 キロのバショウカジキ。

翌日も穏やかな天気。また沖でマグロを流す。午前中 2 回のあたりがあるものの掛

からない。暑いくらいの陽気、心地よい波にうとうとし始めたころ、バチンと糸がはじける音が。糸がどんどん出て行く。止まらない。すでに 300mは糸を出されたころようやくおさまる。すぐに巻き始める。明らかに昨日のカジキとは引きが違う。体すべてを使ってようやく糸が巻き取れる、そんな状態だった。糸を 100m位巻いてはまた 100m位出されを繰り返しと、先が見えない戦いに突入する。「北緯 24 度…分東経 120 度…分を 10 キロの速さで北北東に移動中」と後ろのラジオが言うのを何度聞いたころだろうか。リールを巻いていた手の皮がめくれ始めた。そしてついに糸のつなぎ目が見える、あと 30mほど巻けば釣り上げれる。しかし、そこからまた大魚はもぐり 100mほど出される。だが確実に魚は近づいていることは実感できた。

2 時間半ほどたった頃、ついに巨体が浮いてきた。友達に銛を打ってもらう。その瞬間弱りきった釣り糸が切れる。しかし銛を打ったあと、ギャフ（魚を引きあげる鈎(かぎ)状の道具）を使い、船長と 2 人がかりで船上に引っ張り上げる。全力で引っ張って何とか上げると、なんと延縄の仕掛けがついている。どうやら延縄の仕掛けを食いちぎってさらにそれでも物足りず、餌のマグロに食いついてきたのである。すぐに漁港に戻り計量する。長さは 3m50cm くらいあり、重さはちょうど 150 キロのクロカジキ。

2 時間半格闘したクロカジキ（150kg）

1 日目に釣った 2 匹は標本整理のアルバイトに行っている国立科学博物館に標本用として冷凍空輸で送り、2 日目のカジキは刺身やステーキにしておいしくいただいた。

（東京大学農学部水圏生命科学専修
寺田 拓真）

南部(みなべ) 貝類採集記

和歌山県の南部まで、遊学館に集う貝好きの仲間や泉南高校の方も含め総勢 10 人で貝拾いに行きました。天候は曇り時々雨だったのですが、朝の間は、南部堺漁港で漁船が引き上げてきた海老網くず（市場に出さない貝やカニなど）の中から、採集を行いました。今回は天候の問題で出て行っている漁船が少なく、貝やカニなどが少なかったです。漁師さんのご好意で、取り置きしていた貝やヒトデなどをいろいろもらいました。漁港近くの海岸にも行き、打ち上げの貝殻を拾ったり、生きものの観察もしました。

お昼から行った津井の海岸では、タカラガイが多く落ちていました。このとき、小雨だったので、そのまま次に下楠井に向かいました。着いた時に雨が強く降ってきたのですが、下楠井の貝も少し調べ、現地解

散しました。今回は、合計で 136 種の貝を採集しました。

南部堺漁港で海老網くずを探る

南部　貝採集リスト　　2010. 2. 11(木)

科名	和名	南部堺漁港	漁港横	津井	下楠井
ヨメガカサガイ科	マツバガイ		○	○	
	ヨメガカサ		○	○	
ミミガイ科	トコブシ				○
	クロアワビ				○
ニシキウズガイ科	アシヤガイ		○		
	オニノハ		○		
	ニシキウズ			○	
	ムラサキウズ			○	
	ギンタカハマ				○
	コシダカガンガラ				○
サザエ科	カタベガイ	○			
	サザエ				○
	タツマキサザエ	○			
	コシダカサザエ		○		
	スガイ				○
	ウラウズガイ	○			
	カサウラウズ	○			○
	オカモトウネ	○			
	ハリサザエ				○
	サラサバイ	○			
オニノツノガイ科	コベルトカニモリ	○			
	メオニノツノガイ	○			
ゴマフニナ科	ゴマフニナ			○	
ソデボラ科	マガキガイ	○	○	○	○
カリバカサガイ科	ヒラフネガイ	○			○
タカラガイ科	ハチジョウダカラ			○	
	ヤクシマダカラ		○	○	○
	ウチムラサキダカラ				○
	ハワイクチムラサキダカラ			○	○
	ホシキヌタ			○	○
	ヤナギシボリダカラ			○	
	ナツメモドキ		○	○	○
	スソムラサキダカラ				○
	メダカラガイ		○	○	○
	チャイロキヌタ		○		
	ウキダカラ		○		
	アリソンエダカラ			○	
	コモンダカラ		○	○	○
	ハツユキダカラ		○	○	○
	オミナエシダカラ		○	○	
	ナシジダカラ		○	○	
	ウミナシジダカラ			○	
	カモンダカラ		○	○	
	アヤメダカラ		○		
	ハナビラダカラ		○	○	
	キイロダカラ		○		
	ハナマルユキ		○	○	○
	シボリダカラ		○		
	サメダカラ		○		
マツワリダカラガイ科	マツワリダカラガイ	○			
タマガイ科	ツメタガイ				○
	マンジュウガイ		○		
	ホウシュノタマ		○		
	リスガイ		○		
	ネズミガイ		○		
	オオネズミガイ		○		
オキニシ科	オオナルトボラ	○			○
	シロナルトボラ			○	
トウカムリ科	ウラシマガイ				○
	タイコガイ				○
ヤツシロガイ科	ウズラガイ				○
	スクミウズラガイ(？)				○
	ヤツシロガイ				○
フジツガイ科	オオゾウガイ	○		○	
	カコボラ	○			○
	ボウシュウボラ	○			○
	シノマキガイ				○
ビワガイ科	ビワガイ	○			
アッキガイ科	アッキガイ				○
	イチョウガイ	○			
	オニサザエ				○
	センジュモドキ	○			
	コガンゼキ	○			
	ガンゼキボラ	○			
	ヒメヨウラク	○		○	○
	カゴメガイ	○			
	シロレイシダマシ			○	
	シロレイシ				○
	ウニレイシ	○			○
	クリフレイシ			○	
	ルリガンゼキ	○			
	カブラガイ				○
フトコロガイ科	マツムシ	○	○		
	タモトガイ		○		○
ムシロガイ科	ムシロガイ		○		
	ムシエビ			○	
エゾバイ科	バイ				○
テングニシ科	テングニシ				○
イトマキボラ科	イトマキボラ	○			
	ヒメイトマキボラ				○
	ツノキガイ(？)				○
	ナガニシ	○			
	チトセボラ	○			○
	ナガサキニシキニナ	○			
マクラガイ科	？		○		
フデガイ科	？		○		
	イワカワフデ(？)				○
	ヤタテガイ			○	
ツクシガイ科	ミノムシガイ		○		○
	ハマオトメフデ		○	○	
イモガイ科	タガヤサンミナシ	○			
	サヤガタイモ			○	
	ガクフイモ			○	
	ベッコウイモ			○	
	サラサミナシ			○	
	カバミナシ			○	
	キヌカツギイモ			○	
	イボシマイモ			○	
	オゴクダイモ(？)			○	
タケノコガイ科	シロオビトクサ(？)				○
クダマキガイ科	？	○			
ナツメガイ科	ナツメガイ		○		
フネガイ科	エガイ		○	○	
	ハナエガイ		○		
	コシロガイ	○			
ヌノメアカガイ科	ヌノメアカガイ				○
イガイ科	クシャクガイ			○	
	ヒバリガイモドキ	○			
	ムラサキイガイ	○			
	イシマテ	○			
ウグイスガイ科	ウグイスガイ	○			
	トゲアザミウグイス	○			
ミノガイ科	ミノガイ	○	○	○	
	オオシマハネガイ(？)				○
ウミギク科	ウミギク	○			○
	ダンドクメンガイ	○			
ベッコウガキ科	カキツバタ	○			
イタボガキ科	ワニガキ	○			
トマヤガイ科	トマヤガイ		○		
ザルガイ科	ザルガイ		○		
	ナガザル		○		
	ハナザル		○		
	トリガイ	○			
マルスダレガイ科	ケマンガイ		○		
	イナミガイ		○		
	スダレガイ		○		

同定協力：児嶋 格

（鈴子 勝也、鈴子佐幸）

シラスウナギを採集

3 月 11 日に、近木川の河口で、川口と塚本で、網でシラスウナギを 1 匹取りました。初めは何もおらないと思ったけど、シラスウナギが、土の中からもぞもぞと出てきたから、びっくりしました。近木川の河口では春に毎年やってくるそうです。

二色の浜側では、きれいなヒメハゼが 2 匹、不気味なイトマキヒトデも 2 匹、ほかコシダカガンガラやイボニシなどの貝、貝殻に入ったヨモギホンヤドカリをどっさり取って自然遊学館に持って行き、名前を教えてもらいました。そして、ヒトデは、自然遊学館の水槽に入れてもらいました。取ってきたガンガラの貝は、食べられるそうです。でも、不味そうだったので、やめて逃がしに行きました。

川口家ではウナギやタイリクバラタナゴなどを飼育しているので、今回の採集したヒメハゼとシラスウナギも、持って帰って飼う事にしました。

（貝塚市立第 1 中学校 1 年
川口 達也、塚本 匠）

◆寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

（※2010 年 3 月分まで）

＜哺乳類＞

◆金山春輝・田中天晟・田中一成・矢野温大さんより
アブラコウモリ　生体 1 点
貝塚市二色　2010 年 2 月 19 日採集

◆児嶋 格さんより
アカネズミ　死体 1 点
紀ノ川市桃山町 2010 年 3 月 16 日採集

＜魚類＞

◆三宅壽一さんより
シマヨシノボリ　生体 2 点
阪南市井関川桑畑　2009 年採集
シマヨシノボリ　生体 3 点
阪南市田山川　2010 年 3 月 11 日採集
クロヨシノボリ　生体 2 点
泉州地域　2009 年採集
クロヨシノボリ　生体 11 点
泉州地域　2010 年 3 月 11 日採集
ゴクラクハゼ　生体 2 点
男里川河口　2009 年採集
タウナギ　生体 1 点
紀ノ川川辺橋　2010 年 2 月 25 日採集

◆小川武士さんより
チチブ　生体 3 点
近木川河口　2010 年 3 月 21 日採集

＜軟体動物＞

◆三宅壽一さんより

オオタニシ　生体 2 点
泉州地域　2010 年 2 月採集
マシジミ　生体 4 点
阪南市茶屋川　2010 年 3 月 11 日採集

＜甲殻類＞

◆辻慶佑さんより
モクズガニ　甲羅 1 点
貝塚市二色浜　2010 年 2 月 13 日採集

◆三宅壽一さんより
ヤマトヌマエビ　生体 2 点
阪南市飯の峰川　2010 年 3 月 11 日採集

＜棘皮動物＞

◆川口 達也、塚本 匠さんより
イトマキヒトデ　生体 2 点
二色の浜　2010 年 3 月 11 日採集

＜昆虫＞

◆辻和馬・田村脩汰・諏訪公俊さんより
フタモンアシナガバチ　巣 1 点
貝塚市二色　2010 年 2 月 3 日採集

◆南由樹さんより
チョウセンカマキリ　卵嚢 1 点
貝塚市加神　2010 年 2 月 28 日採集

◆用松春也さんより
フタモンアシナガバチ　巣 1 点
貝塚市二色　2010 年 3 月 19 日採集

＜写真＞

◆食野俊男さんより
カワセミ　1 点
近木川永久橋　2010 年 1 月 26 日撮影
ノスリ　1 点
貝塚市千石荘　2010 年 1 月 27 日撮影

◆スタッフ日誌

3 月 13 日、熊取町の煉瓦館において見出川フォーラム（主催：見出川流域水循環再生協議会）が開催され、自然遊学館も見出川大師橋の水生昆虫と水生動物の紹介をしました。

自然遊学館ブース

展示内容は、6 回行った現地調査の方法と結果をまとめたパネル、生体写真、液浸標本および生体です。水生昆虫の種数はそれほど多くなかったのですが、水生動物はイボビルなど近木川で確認されていない種も含めて 27 種と、これまで自然遊学館が近木川と津田川で行ってきた調査の中でも屈指の多さでした。ドンコ、カワムツ、カワヨシノボリなどの生体の展示は三宅壽一さんに協力していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。（鈴・浩・岩）

3 月 28 日、近木川河口左岸にて行われたゴミ拾いに参加して来ました。主催は「海守 OSAKA」で、昨年からアドプト・リバー近木の活動を行っている団体です。ヨシ原に溜まっているゴミは膨大で、あっというまに大きなゴミ袋が何十袋もたまりました。

市外の方も多く参加されていたのには驚きでしたが、大阪湾をきれいにしたいという思いに立てばもっともなことでしょう。

また、周辺に生息する鳥の紹介パネルを堤防フェンスに設置されました。　　（浩）

◆お知らせ

生き物切り絵展開催中！

5 月 16 日（日）まで当館多目的室において生きものを題材にした切り絵を展示しています。ぜひご覧ください。

「貝塚の自然第 12 号」発行！

3 月 23 日に、2008 年度の活動報告書である「貝塚の自然第 12 号」を発行しました。市内の生きものの情報が満載です。当館のほか、貝塚市内図書館と市内の 3 公民館でご覧になれます。また、市内の小中学校にも配布しています。

＊ 自然遊学館だよりのバックナンバーは、
下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2010　春号（No.55）
貝塚市立自然遊学館
〒597-0091
大阪府貝塚市二色 3 丁目 26－1
Tel.　072（431）8457
Fax.　072（431）8458
E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp
http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/

発行日　2010.4.30

この小冊子は庁内印刷で作成しています.

津田川（大阪府岸和田市・貝塚市）

一、津田川の源流は和泉山脈葛城山
峰より落ちくる小川が元で塔原ぬけて
相川・河合川・阿間河滝にて落差ある
滝となり、雨降り滝と人は呼ぶ
夏に旱魃ありし時、雨乞祈願をどこにする

二、七三二年より、尚々古きいにしえに
意賀美神社の雨降大明神に願いかけ
恵みの雨を授かって、降りくる雨水は
阿間河川と名を変えて、流れも清く
天神山を右に見て津田川として流れゆく

三、天神山は有真香に天照大神の孫天神
饒速日命の物部氏がいたことに由来する
畑町すぎて貝塚久保にて小瀬川と合流なり
久保には507年天神饒速日命を祀る阿理莫神社あり
津田の町より大阪湾なる茅渟の海へと流れ出す

四、津田川は流水多くして地下水多し
地下水湧き出る井戸を七ヶ所掘って
熊野街道より浜辺迄水道として給水する
津田川の由来を紐とけば建武元年(1334)楠正成一族の
和田高家と岸和田に共に来た津田氏の名であろう

平21・9・3日 貝塚市 北町（天北町）出身 半田73・5住 見學 稔(76) 記